

透析医のひとりごと

「喪失体験」

阿岸鉄三

この2~3年、自らの喪失体験に対する反応に悩んでいる。80歳をまじかにして、いまさら失うものもないと自分でも思っていた。喪失体験は、例えば、長年連れ添った連れ合いに先立たれなどといったことである。反応としては、うつ状態になったりすることもある。わたしの場合、反応は、もちろん、精神的・心理的、そして肉体的、さらに、スピリチュアルにも及んでいる。自らの反応を楽しみながら観察している、ちょっと奇妙な自分がいる。喪失体験に反応している自分、反応を認識している二人称的存在、そしてそれらを観察している三人称的存在に気づいている (awareness)。離人症的傾向があるのかもしれない。

2013年1月に脊柱管狭窄症（頸髄症）で手術をうけたが、後遺症で現在も手に知覚障害、脚に歩行障害がある。いろいろなものを短時日のうちに、喪失した。

今から考えると2012年（78歳）秋頃まで、心身的にも、スピリチュアルにも、無茶苦茶、いわゆる元気であった。今考えてみて、自分でも理解不能というくらい元気であった。2000年に、東京女子医大を定年になったが、約70ある著編書の多くは定年前後の仕事である。IBMからでていたVIA VOICEという音声文字に変換するソフトのお蔭でものすごく原稿が書けた。

遊ぶことを自慢するバカはそうはいないと思うが、あえて紹介したい。アウトドアスポーツを中心とするものである。それができなくなったのが、喪失である。

週末を待ち兼ねて、本栖湖に近い別荘へ行く。あきれた妻が同行しなくなったので、自分で出鱈目の料理をして食事の用意もした。山野草を食べ、自己流のピザを焼く。独りで、BBQ。電信柱の太さの庭の木をチェーンソーで倒し、斧をふるって、薪にして暖炉にくべる。富士山一合目の庭は、火山灰地なので、近所の酪農家から買った牛糞を、自分で一輪の猫車で運び、畑を作った。ウサギ・鹿から畑を守るため、鳥獣防護ネットで蚊帳様のものを作って木からつるした。当然、庭の樹木の手入れをする。朝から夕方まで、外で作業する。これが、飯のタネならつづけられない。勝手に、好きだからやれる。札幌の馴染みの居酒屋の女将に、真っ黒に日焼けしたのを野良仕事でもやっているのと、尋ねられたこともある。

万歩計を腰にぶら下げて、本当に、ほぼ毎日10,000歩いた。マウンテンバイクで富士山麓を駆け巡り、自己流の水彩画を描く。外国の学会に出席するたびに絵を描いた。そのうち、絵を描くために学会へ行くのではないかと、自分で思ったこともある。スキーは、札幌生まれなので幼いころからやっていた。毎冬、2~3回は、ニセコにスキーに行っていた。カナダ・ウィスラーで、ジェットヘリで山の頂まで飛び、氷河を滑るスキーをしたこともある。バンフ・タホ湖・アスペンも素晴らしかった。青木ヶ原樹海の中の新雪をクロ

スカントリースキーで歩き回った。

67歳頃から、ヨットを始めた。葉山で、裕次郎灯台を見ながら、デインギを操れるようになった。極め付けは、地中海のミノルカ島でのセイリング。アラスカサーモンのフィッシング、New Zealandで50cmのブラウントラウトを釣り、フレンチレストランで料理してもらったこともある。Minnesotaに12,000の湖があると聞き、釣りに行き、フロートのついたセスナーに乗り、湖を釣り渡った。South Carolinaでkayak。New Caledonia, Fiji, Palau, Florida, もちろん、沖縄でsnorkel。ちなみに、当時のパラオ大統領の奥さんは透析患者で、日本へ来るとわたしが勤務していた病院で透析をしていた。そんな縁で、4回もPalauに招かれ、赤坂の迎賓館に招かれて食事をしたこともある。今考えると滅茶苦茶忙しくて、だけど滅茶苦茶楽しかった。疲れた感じもなかった。

しかし、2012年の秋も深くなって、歩行のさいにふらつく感じがでてきた。なんだこれ、自分で系統的神経疾患と考え、診察してもらったら、脊柱管狭窄症(延髄症)で、手術適応とわかった。2013年1月に整形外科で手術をうけた。しかし、後遺症が残った。杖なしでも歩けるが、安心安全のため杖を突いて、のろのろ・のたのたしか歩けない状態である。字も書け、箸を使えるが、両手に知覚障害がある。そして、術後に睡眠障害がでてきた。ベッドに入ったらボタン・ゲーだったのに……。そして、頻尿である。それまで、ピンピン元気一杯でなんでもできるのが当然だったのが、できないのである。身体的障害という喪失体験を、自分で受け入れられず、適応不全から睡眠障害が発現しているらしい。

以前は、年齢不相応の元気さ加減だったとは自分でも思う。だけど、こんなつもりでなかったと思う。自分こそは、ピンピンコロリと、根拠もなく思っていた。ピンピンコロリの確率は5%だそうだが……。多くの方が20年前に経験した男性の更年期症候群が、いま、まとめて発症しているという医師の診断もあった。なんで、やたらと元気だったのだらうと思う。医療気功と称して、患者に気功をしていたが、自分にも気が巡ってくる感覚があったが、そのせいかもしれない。

神様は、ケチクサイ。お前だけに、楽しいだけの人生を送らせる訳にはいかないと考えているに違いない。その意味では、平等か？ 人並みに苦勞も経験せよかあ……。でもなー……。

でも、なにか得たものもあるような感じもある。多くの医者は患者の喪失体験について、その存在すら知らないのではないだろうか。恥ずかしながら、わたしも知らなかった。すべての患者は、それぞれの喪失体験をしているに違いない。患者の喪失体験に医師はいかに対応すべきだろうか。

東京女子医科大学(名誉教授)(東京)